



昭和46年(1971年)

5月号(No. 311)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
植村、伊藤両隊員南壁要員に決る	1
深田久弥氏のこと	2
弔辞	2
第9回の一本書解題(中)	7
山岳65年の内容予告	7
会員通信	
雨ヶ岳	2
遠野物語碑	3
1970年のヒマラヤ	
関西登高会	4
関西大学山岳会	4
早稲田大学山岳部	4
慶応大学山岳部	5
日本山岳会	5
女子登山クラブ	5
東海支部	5
マナスル西壁便り	5
ローツェ各峰の高度変更	5
図書紹介	
北方植物の旅	8
立山と白山	8
図書室便り	
図書受入報告	8
第2回山岳図書語る夕べ	8
洋書受入報告	9
会務報告	
3月臨時理事評議員会	9
4月臨時理事会	10
4月理事評議員会	10
会員異動	10

植村、伊藤両隊員南壁要員に決る

国際エベレスト登山隊便り

三月二十一日、ベリチェ休養四日目
あすはBCへ向け隊員全員、ポーター
四百人とともにロブジェにはいります
BC着はさらにゴラクシブを経て二
十三日の予定です。この便りが着くこ
ろはBCにはいり、アイスフォールの
ルート工作が開始されているでしょう
現在隊は順調に進んでおります。もち
ろん私たちが、髪、目の色の違うヨー
ロッパ人の中でも楽しくやっております。

私たちは二月末日カトマンズを出発
し、ロブソングよりエベレスト街道の
キャラバンにつきました。昨年の日本
隊と同じコースです。途中半パンツ、
ボロシャツで歩いたり、羽毛服を着て
歩いたり、谷間の川で泳いだり、チャ
ン、ロキシーの地酒をあおりながらシ
ェルパの故郷ソロクンにはいりまし
た。タンボチエの寺院には三月十三日
に着きました。昨年の日本隊より約一
週間遅れております。三月十六日より

ベリチェで休養と高度順化をはかって
おります。日本隊より約十日遅れてカ
トマンズを出発しましたが、BC着は
全く同じ三月二十三日となっており、
国際隊は高度順化を短縮四日で切りあ
げております。
隊長のノーマン・デイレンファース
はいうまでもなく隊の中心人物として
皆に親しまれ、張り切っています。参
加十二カ国、三十二人の隊員の共通語
といえ英語が主ですが、フランスの
国会議員ビエール・マゾー、スイスの
ボーシェ夫妻などフランス語で、ドイ
ツのトニー・ヒーパー、オーストリ
アのレオ・シュレマー、ウオルフガン
グ・アクストのドイツ語勢などミレー
イングの時にノーマン氏が英語でやっ
た後すぐ独、仏語と通訳します。国の
違い、民族の違いにより、いろいろ言
葉、風俗、習慣の違いはありますが、
皆一つの目標に向かい、言葉など関係
なく陽気にやっております。つまりこ

の隊は小さな国際社会というより、エ
ベレスト共和国を形成しております。
いよいよわれわれのメンバーが決定
しました。三月十五日キャラバン初
のミーティングが開かれ、各隊員が希望
のコースを申し出、全隊員の意思通り
西陵隊、南壁隊が決まりました。私た
ちはもちろん南壁です。
まず南壁隊、ドイツのトニー・ヒ
ーパー(四一)を最年長者に、ジャン
・エバンズ(米)ゲリー・コリバー
(米)ビーターソン(米)ドン・ウィ
ランズ(英)ドガール・ハストン(英)
レオ・シュレマー(オーストリア)そ
れに伊藤、植村の九名です。これにB
Cのカメラマン二名が南壁にはいり
ます。西陵隊にはウオルフガング・ア
クスト(オーストリア)カルロ・マリ
ク(伊)オット・エリッセン(ノル
ウェー)ミッシェル・ボーシェ(スイ
ス)イベット・ボーシェ(スイス)ヨ
ン・デグラント(ノルウェー)ハッ
ンヌ・バハグナ(インド)ビエール・
マゾー(フランス)デビッド・アイル
ス(米)の以上九名です。
その他は隊長、酸欠係、医師、BB
C関係者です。西陵の登攀隊長はオ
ーストリアのウオルフガングとすでに決

定していましたが、南壁の登攀隊長は
隊長の案でジョン・エバンズ(米)と
皆に承認され決定しました。
われわれ南壁隊は彼を中心に毎夕食
後ミーティングを持ち、南壁のタクテ
ィックなど討論しております。現在の
ところ南壁に關し何一つ結論が出ま
せん。まだ西陵と南壁の装備の配分も行
なわれておらず、ルートの選定も、キ
ャンプの位置も決まっています。基
本としては東南壁と同様ABCから上
はキャンプを四つ南壁に置き、最終キ
ャンプはイエロー・バンド上八五〇〇
mとし、最後キャンプまでフイックス
ド・ロープを張ってルートを確保する
ということだけです。皆の意見として
南壁の取付地点も、日本隊のルート
を検討した上で最終ライン・クウムから
実際に見た上で最終的に決めようとい
うものでした。まだ細部にわたって南
壁の装備は見えていませんが、これまで
の話によると日本隊より壁の対策がさ
れておらないという感じで、まずテン
タも雪の上に張るもので、もし壁にテ
ラが見つかない場合は使用不能、
日本隊のような特別なジュラルミンの
土台が用意されていないなどです。
しかしこの南壁隊員を見るといずれ

も全世界に知れた一発屋の名クライマ
ーばかりで、もし八千mにキャンプの
建設に成功したら岩壁を抜けて頂上に
立つてしまおうでしょう。昨春アンナ
ブルナ南壁を登ったワイランズやハス
トン、ヨセミテの大岩壁エル・キャプ
サン、ヨセミテの大岩壁エル・キャプ
サンなどの経歴からもその意気は十分
うかがえます。私たちが二人は彼らとこ
まで肩を並べてやっていると問題で
すが、私たちは昨年の経験を生かし慎
重に頑張るつもりです。
今年は昨年以上に天候不順な感じが
します。四月にはいりた天候も落着く
と思います。今年の計画も五月いっ
ぱいを登頂期間としており、成功のカギ
は天候にあると思います。タンボチエ
から見た範囲では南壁の雪の状態は昨
年同様雪が付いておらず、黒い壁のよ
うです。
いろいろ私たちのためお骨折りいた
だき、まことに有難く思っております
とにかく慎重に絶対事故を起こさないよ
う頑張ります。一昨日ベリチェで全員
の体重計量をしたところ、減量通
り一・五キロ増え、伊藤も減量な
し、他の隊員はハストンが九キロもやせ
大半のものが二キロから三キロやせて
おりました。ヨーロッパ食をおいしく
喰べられ、私達二人はいたって健康そ
のものです。(三月二十日、ベリチェ
にて) 植村 直己

深田久弥氏のこと

藤島敏男

茅ヶ岳へ登るについて、日帰りを好まない僕達はどこか泊場をと探がした結果、穴山鉱泉の宿を甲府の山村正光君が予約しておいてくれたので、初日はそこで泊ることにした。

穴山駅から五分もかからない鉱泉宿へ、東京から直行するもの、あんまり芸がない、すし歩いて行こうということになって、三月二十日おひる頃、藍崎で下車した。駅前通りで屋敷をすませ、裏の台地上に上った。釜無川と塩川とに浸蝕され、地図に七里岩と記るされているところだ。右手には八ヶ岳から秩父連山、左手は雪の光る鳳凰連山が肩に迫る。そんな景観をたのしみながら、桑畑だの雑木林のあいだを漫

あゝの元氣だった深田さんが突然お亡くなりになったとは全く信じられない。古い日本山岳会の会員として君は実によく山に登り、かつ山の研究、著作に熱心であった。

君の名著である「日本百名山」を読むまでもなく、君ほど広く日本の山々を登った登山者はいない。生れ故郷の加賀・越中の山々を君はことに好んで登られた。君の山登りは、ザイルを肩にビッケルを手にという肩をいからした登山ではなく、いかに自然を愛し山にだけこむなごやかな山登りであった。

ヒマラヤを始め、海外の山への関心も特に強く、一九五八年、念願のヒマラヤ登山を実現されたが、君の書庫にあふれる貴重なヒマラヤの文献を見ても、君のヒマラヤの研究は他の追従を許さぬものがあった。

歩し、新府城趾の丘にも立寄って、宿へついたのはまだ四時前であった。汗を流したあとのビールがうまかったのは、いうまでもない。甲府へ戻って翌日出直してくる山村君を交へ、夕食は賑わいが、たのしいものだった。

日本酒は「七賢」というのがうまいとのこと、めいめい銚子二本、あとで各自持参のウイスキーを水割りで一杯。なぜこんなことを明細に記るのかといえば、深田君が倒れたあと、前夜のアルコール摂取量について、しばしば質問されるからである。これはゆつくり食事をしながらの分量としては決して多すぎるとはいえない。まして

日本山岳会の役員として、長く会務に尽力されたばかりでなく、若い人たちの相談役としてもその労を惜しまず、すぐれた作家としての眼を通じた常に新しい知識を若い人たちに与えられたことは、日本の登山の発展にどれほど寄与したかわからない。

君の急逝は、日本の登山界にとつてまことに大きな損失であり、また、まことに心残りなことである。

君の温顔とも永久にお別れとなった。雪安かれとお祈りして弔辞とする。

昭和四十六年三月二十三日

日本山岳会会長 三田 幸夫

〔付記〕 この弔辞は三月二十三日

永福町本願寺別院における告別式で三田会長が読まれたものである。

日頃から酒のきらいな方でない深田君にとっては、物の数ではない、というような量であったろう。

その朝高尾尾九時二十五分でも、やはり早起きしたのだから、山村君が甲府へ来ると、われわれは早速横になった。

そしてさわやかな春分の日朝を迎へた。たふふり眠ったあとの気分はすがすがしい。二台の車に分乗して出発（八時十分）、藍崎へ出て塩川を渡り、おそ咲きの梅、アズノの花咲く山村をいくつすきで、パンズの終点柳平、車道をさらに四キロ、大明神開拓部落まで入った（八時二十五）。茅ヶ岳を真正面にみる。

ひらけたカヤ場をすぎから、せま谷合いのゆるい登り、女岩へついでふりかえると、鳳凰連山の雪が眩しいほどだ。ゆつくり休んでいよいよ頂上直下の鞍部まで、最後の登りにかかる。傾斜はやや急になり、歩きづらいほどの落葉をふんで、明るい疎林の中を、登りきって尾根に達した（十時五〇）。

頂上まで十五分と認めた小さな立札がある。標高千六百mぐらいいであるうみズガキ山、小川山、金峰国師、遠い大ボサツ連嶺、富士は大空に浮んだように高く望まれる。

開拓部落から此処まで二時間余、そのあいだで三回の休止、息せき切つて我武者羅に登ってきたわけではないが僕達はこの鞍部で、ゆつくり腹ごしらえをしたり、目の前にみえる観音峰に通じた、自動車道の無残な傷痕に憤慨し、世の観光開発の愚を論じたりしてまた三十分も腰をすててしまった。

それから「さあ、こんどは山頂の鐘（ビール乾杯だ）」と登り始めたのが十一時二十分。僕は五番目だった。少し離れて深田君がつつき、しんがりは山村君。三分か五分か、うしろのふたりの

話声の中に、イワカガミというのが、僕の耳に入ったので、今の季節に何だろうと、足許をみたのをおぼえている。その途端に「戻って下さい」との呼び声、僕は先行した仲間を声をかけて、バタバタとかけおいた。何秒というあいだである。ほかの仲間もすぐ下りてきた。

足を踏み出したままの姿勢で、巨木のように倒れ、深田君は一瞬にして意識を失ってしまったのだ。つまりいたのか、滑ったのかと駆寄った山村君は深田君が大きなイビキをかいたので、これは脳出血に違いないという。まったく思いもかけぬことが、なんの前兆も予感もなく、突如として起こったのだ。僕達はただ茫然として、立ちつくすばかりであった。

心臓の鼓動が止って、三月二十一日午後一時深田君は還らぬ人となった。急を報じ救援を求めに山村君が山を下り、医師、警察署員を含む十五六名の救護隊の来着まで、約四時半、僕達は眠った深田君の傍で、刻々色調の変ってゆく富士を眺めながら、黙然として、暗然として、悄然として佇んでいた。

風もないおだやかな春の日、親しい仲間と一緒に、好きな山で、苦しみもなく、さぞ本望だろうと人はいうが、僕はそうとおもわない。

これから登りたい山も、まだ沢山あったろう。海のものも出かけたところがあったろう。心をこめて集めた文献を渉猟する楽しみもあったろう。書きたいこと、書くべきことも、頭の中に一杯あったにきがない。

深田君と山へ出かけたのは、こんどの茅ヶ岳行が二十九回目というのだから最も親しい山仲間のひとりであった。深田君！ どうして君は、よく君と一緒に山へ出かけた仲間たちをあとに残して、ひとり先きへ逝ってしまっただのか。（一九七一年・四・九記）

〔追記〕 三月十三日（土）にJACで、山村君に会ったのは一全く偶然であるが、同君が同行しなかったならば、事後処理がくも手際よく運ばれることは、到底望めなかった。同君の連絡によって出勤された、各方面の方々はここに一々記るさなきが、深田君に同行した仲間一同の名において深甚なる謝意を表するものである。

会員通信

雨ヶ岳

村尾 金二

雨ヶ岳は五万分の一図幅「富士山」の西北隅、毛無山から竜ヶ岳、本栖湖に落ちる尾根の中程にある。一、七七二m。

昭和三十八年一月一日、朝七時半、藤島（敏）深田（久）息子のT（以下藤、深、Tと称す）と私の四人で西湖の畔、根場でバスに乗る。前日、河口湖から大石峠、節刀ヶ岳、鍵掛峠を通って根場の渡辺さんという家に泊めて貰った。（その家も先年の崩壊で潰えさつたろうと思われる）バスは風穴で下りて、ちょうど来かった車を頼んで本栖で下りる。本栖湖の南岸の足陰の寒い道を歩いて、川尻から端足峠（雨ヶ岳と竜ヶ岳の鞍部）の道を探したが、どうしても分らない。廃道になったのかも知れない。協議の末、北に廻って仏峠の方から登ることにする。

仏峠から尾根を辿ったが時間切れで途中から引き返す。雨ヶ岳はとうとう登れなかった。

四十四年一月二日、午前十一時、藤、近藤(恒)笠原(藤)川喜田(壮)望月(達)黒柳(満)松本(義)T。白糸の滝から本栖湖行のバスに乗る。前日は身延から橋本を経て御堂平(一、六三四)熊森岳(一、五七四)を越して下部峠を猪之頭(下りたのだが思いの外時間をくって、猪之頭に着いたのが午後十時。白糸の滝の旅館で休んだのは十二時を過ぎていた。それで今日は根原から雨ヶ岳に登るつもりだったが、流石に朝早く起きるものもななく、滝など見物して本栖に向うことになり今度も雨ヶ岳は登らず仕舞だった。

今年二月二十八日、朝七時四十三分本栖発のバスで藤、近、私三人で根原に行く。前日は藤、近、川、と四人で足和田山から紅葉台を通り本栖に泊る。黒は自動車運転してTと先についていた。望が夕方六時過一人でやって来る。今朝黒が運転する車で川、望、Tが先に根原から西に入っている。天気は富士山は雲でかくれていたが西はよく晴れてバスの中から白根三山が青空に白く輝いているのが見えた。私達三人が根原でバスを下りて、小学校の前の歩道橋に登ってどこから入ろうかと眺めていたら自動車小学校に入ってくる。先生かも知れない。山の登り口を聞いて見ようと思ったが、念のために自動車の番号札を見た「相模」となっている。山梨が静岡の番号なら土地のことも分るだろうが、これでは駄目だと思つて横を通りすぎようとしたら、中の人が「どうぞ」という。よく見たら、先に皆を送った黒が引返して私達をバス道まで迎えに来てくれたのであった。

バス停留場のすぐ傍に大昭和製紙根

原造林地と書いた柱の所から二キロ位西北に入ったところに大きな貯水池があってそこで車は停まる。先に着いた連中と一しょに道を探したが無い。な

るべく鞍部の近くに向っている沢の中を登る。周囲の藪に比べて割に歩き易い。小一時間も登ると沢の右岸下から左岸上の方に踏跡が見える。その道を伝て行くに暫くしてまた沢の中に入って消える。結局沢をかなり登りつめると、今度は杉の植林が下生えが延びていて歩き憎くなり刻々と茨の棘にひっかかる。それから段々下生えが小さくなり小さな笹の藪を所々横にぬけるとやっとな所を縦に通る。小さな笹の敷きつめたところで歩くのには大した苦勞はない。北に本栖湖側を下りる端足峠の道を探したがどこにも見当たらない。矢張り魔道なのだろう。登り始めてここまで二時間くらいかかった。

その間、富士山の方は見えないが、まだ好い天気だった。貯水池が大きく四角く見え、富士の西斜面にあんな所に部落があるのかと思うような所に家が見え、近くはオートバイのサーキットでもあるのか、ゴウゴウと激しい音が聞こえて来る。竜ヶ岳の笹原は細く波打ち、本栖湖の水は青かった。

鞍部から初め少しの登りは小笹の中を歩いて行くが、やがて雪が出て来るのと相当辛い。深い所は膝よりも深くもぐる。傾斜もきつくなる。若し黒とTのラッセルで後から着いて行くだけでも草臥れる。その中霧が出て来て竜ヶ岳も見えなくなった。辛い三時間足らずを登ると霧をすかして雪の頂上というのが見えて来る。大い頂上というものはそれらしいところから二つ三つ先だから、皆はそれぞれ希望の観測を含めての想像で勝手なことをいいながら行くに幸せにも間もなく一番高いと

ころに出た。下は笹なのだろうか、平らなところで積雪一m以上。東、富士山に向った方は伐採してあるが、西北の方は黒木の林に感じが好い。

例によって鎌ビールで乾杯。この時藤さんが出したガラスのコップがパチンと割れた。科学的に幼稚な頭脳を集めての結果、それは暖かかったコップが雪に触れて急に冷えて割れたのだらうということになった。

午後一時半藤、近、私はこれから北に尾根を仏峠の方に下り、出来れば筋代に下りて見たいの望は一行と分れた。一行は元来た道を下りて自動車道その道の中に帰京する。ところが私達が歩き出して五分もたたない中に雪が逆も深く時間がかかることが分り引返す。頂上を下り始めたのが一時四十分。先に下りた一行と十分の違いだった。たがとうとう追い付かなかった。

下りはさすがに早い踏みくずした雪道をガムシャラに下りるのだから相当疲れる。それでも鞍部まで登り三時間足らずが下りは一時間ちよつとだった。鞍部に出てそのまま何も見えない霧の中を最初は尾根筋の藪の中を真すぐ下りる。途中から小沢に入って、間もなく大きな沢に出ると、それが自分達が今朝登った沢だった。それにとこ

ろどころ残った雪の上の足跡は下を向いていて、分れた一行も同じ道を歩いたことが分った。今朝見えた跡跡の右岸下を下りる道を行って植林の中を抜けて思いかけず早く貯水池の横に出た。根原のバス道路に出るとすぐバスが来て本栖まで行き今朝出た宿に入。午後四時半。濡れて冷たい疲れた身体には風呂と炬燵が有難い。高き千七百m余、登り降り八時間足らずの山ならば、若い年代なら脚と馬力に物をいわせ、少々の藪や雪は鎧袖一触、まかり通ることも出来ようが、その年令に半世紀の馬酔を加えた黄昏

的年代の身で、そして何度目かにやっ

遠野物語碑

山下 久男

(3・1)

昭和四十六年三月二十四日午前十一時、遠野物語碑の除幕式が国鉄遠野駅前広場で行われ、関係者の一人として私も参列した。遠野物語の著者は柳田国男先生で、本会の草創期の会員(明治三十九年四月入会、会員番号六七番)でもあった。この本の初版は明治四十四年六月十四日発行で、三百五十部が上梓され定価五十銭であった。作家を志していた遠野、土浦村山口出身の佐々木喜喜青年が、その郷里の神話、伝説、昔話、歌謡などを柳田さんに語った。それに深い関心を寄せた柳田さんは記録され、一九九項目に編纂されたもので、後にこれが日本民俗学の最初の記念的著作として注目され、今や古典の一つとして高く評価されるに至った。

除幕式には柳田さんのお孫の柳田清彦さん、話者の佐々木喜喜さんの次男佐々木光広さん、日本民俗学会代表理事、大藤時彦氏、地元からは遠野市長工藤千蔵、市議会長古川清氏ら多数参列した。碑の高さ幅各約一・五m、長さ約二mの素朴な自然石で、それに黒みかげ石をはめてある。それらに刻まれた碑文は物語初版の冒頭からの数行である。「この話はすべて遠野の

人、佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年二月頃より始めて夜分折々訪ね来り、此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手に非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり。

思うに遠野郷には此類の物語諸数百件あるらん。我々はより多くを聞かんとを切望す。」柳田 国男 その裏面に刻まれた建碑の由来は次の通りである。

「柳田国男先生は遠野の山河と人とその民俗とに深い愛情を寄せられて、遠野物語を上梓された。これが日本民俗学の最も記念すべき最初の文献となった。先生の学徳を慕い、ここに記念の碑を建てて、永い感恩の情を表わすと共に我等の祖先の心を偲ぶよすがとするものである。

遠野物語上梓六十年後の世、昭和四十五年。」

碑文の揮毫は大藤時彦氏、建碑の由来は、筆者が書き、彫刻は遠野市綾織町の石工山田善六さん(七十二歳)の手になるものである。

なお佐々木喜喜さんは鏡石なるペンネームをその頃、使った。泉鏡花の作品を愛読し、鏡花にあこがれと尊敬を抱いていたからである。(昭和46・4・5)

今年のウェストン祭

今年のウェストン祭は六月五、六両日上高地で例年の通り行なわれるが、今年は二十五回を迎えるので、五日午後六時から上高地で前夜祭を行ない、エベレストの映画を上映、また六日は午前八時半から、横、松方、三田、佐藤(久)各氏の記念講演会が上高地で開かれる。

多数会員の参加をお待ちしております。

一九七〇年のヒマラヤ

日本隊

ヒマラヤの登山記録に関する薬師義美君の謄写版刷一覧表は、私のようなクロニクルにとってはとても有用で、何を書くにも私はこれを基準にしている。

ここでご紹介するやや簡単にした記録は、一応登頂などの月日順になっているが、くわしくはいずれ「山岳」に出ると思う。

今年もまた海外へ多くの報告を送ったがその基になった貴重な資料を送って下さった方々に厚く御礼申上げる。この間、ACのダンガーから「アルピニズム」にダウラギリIVの初登のことが誤って報じられていたようだったが、あれは貴報といずれが正しいのか、と言ってきた。

あの雑誌でも鶴呑みには出来ないようだ。もともと二、三年経てば皆訂正されていくのだから、そう鬼の首でもとったようにあわてて騒ぎ廻る必要はあるまい。

(吉沢)

A、プレ・モンスーン

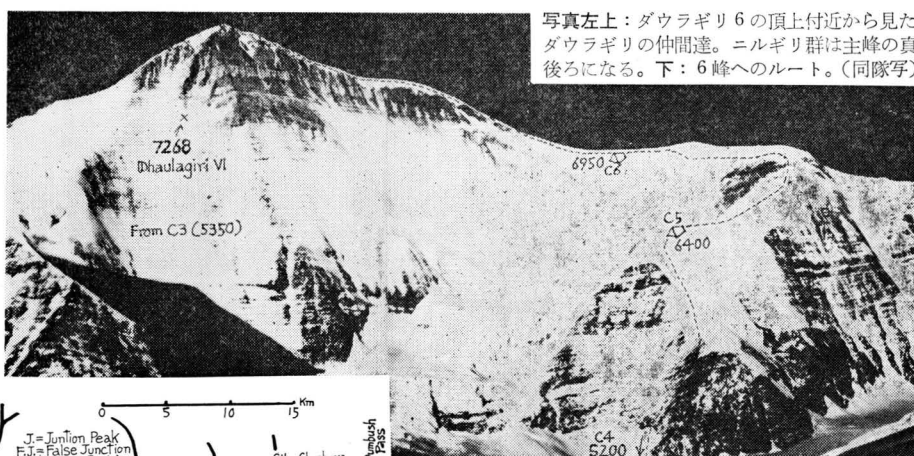
一、関西登高会（大阪岳連）

タウラギリVI（七二六八m）初登
隊員、野村哲也（隊長、43）、山根孝明（32）、中村久住（26）、水谷護（26）
木村正一（22）、岩佐元春（27）、山村清治郎（23）、河津士郎（22）。
登山活動、カトマンズ、（37・17）、ボカラ（19発）、カベ・コーラBC（四一〇〇m）CI（四七〇〇m）、C3（五五〇〇m、47）、C5（六



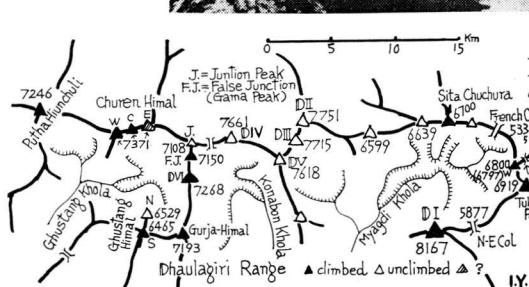
四〇〇m、412）、C6（六九五〇m 416）、登頂（417・1130、中村、木村、山村、河津）。BC撤収（420）。日本往復正味二カ月。

写真左上：ダウラギリ6の頂上付近から見たダウラギリの仲間達。ニルギリ群は主峰の真後ろになる。下：6峰へのルート。（同隊写真）



二、関西大学山岳会

アンナプルナIV峰（七五二五m）第七登。
隊員、川北昌博（隊長、31）、竹尾宗和（副隊長、26）、西嶋憲（27）、市島宏一（25）、寺本光雄（25）、麻田勝（25）、古谷一彦（23）、横山隆義（39、医師）。



ず引返す。ボカラ着全員（511）、カトマンズ着（全員、519）、六五〇〇mでの氷壁は相当のもの。

登山活動、ボカラ発、（318）、BC（327、IV峰北面のサブジチュエ1、三七〇〇m、後に四〇〇〇mに移す）、CI（43、五〇〇〇m）、C3（19、五九〇〇m）、C4（22、六四〇〇m）、C5（23、六六〇〇m）、C6（25、六八〇〇m）、C7（29、七〇〇〇m）、C8（32、七二〇〇m）、C9（35、七四〇〇m）、C10（38、七六〇〇m）、C11（41、七八〇〇m）、C12（44、八〇〇〇m）、C13（47、八二〇〇m）、C14（50、八四〇〇m）、C15（53、八六〇〇m）、C16（56、八八〇〇m）、C17（59、九〇〇〇m）、C18（62、九二〇〇m）、C19（65、九四〇〇m）、C20（68、九六〇〇m）、C21（71、九八〇〇m）、C22（74、一〇〇〇〇m）、C23（77、一〇二〇〇m）、C24（80、一〇四〇〇m）、C25（83、一〇六〇〇m）、C26（86、一〇八〇〇m）、C27（89、一〇一〇〇〇m）、C28（92、一〇二〇〇〇m）、C29（95、一〇三〇〇〇m）、C30（98、一〇四〇〇〇m）、C31（101、一〇五〇〇〇m）、C32（104、一〇六〇〇〇m）、C33（107、一〇七〇〇〇m）、C34（110、一〇八〇〇〇m）、C35（113、一〇九〇〇〇m）、C36（116、一一〇〇〇〇m）、C37（119、一一一〇〇〇m）、C38（122、一一二〇〇〇m）、C39（125、一一三〇〇〇m）、C40（128、一一四〇〇〇m）、C41（131、一一五〇〇〇m）、C42（134、一一六〇〇〇m）、C43（137、一一七〇〇〇m）、C44（140、一一八〇〇〇m）、C45（143、一一九〇〇〇m）、C46（146、一二〇〇〇〇m）、C47（149、一二一〇〇〇m）、C48（152、一二二〇〇〇m）、C49（155、一二三〇〇〇m）、C50（158、一二四〇〇〇m）、C51（161、一二五〇〇〇m）、C52（164、一二六〇〇〇m）、C53（167、一二七〇〇〇m）、C54（170、一二八〇〇〇m）、C55（173、一二九〇〇〇m）、C56（176、一三〇〇〇〇m）、C57（179、一三一〇〇〇m）、C58（182、一三二〇〇〇m）、C59（185、一三三〇〇〇m）、C60（188、一三四〇〇〇m）、C61（191、一三五〇〇〇m）、C62（194、一三六〇〇〇m）、C63（197、一三七〇〇〇m）、C64（200、一三八〇〇〇m）、C65（203、一三九〇〇〇m）、C66（206、一四〇〇〇〇m）、C67（209、一四一〇〇〇m）、C68（212、一四二〇〇〇m）、C69（215、一四三〇〇〇m）、C70（218、一四四〇〇〇m）、C71（221、一四五〇〇〇m）、C72（224、一四六〇〇〇m）、C73（227、一四七〇〇〇m）、C74（230、一四八〇〇〇m）、C75（233、一四九〇〇〇m）、C76（236、一五〇〇〇〇m）、C77（239、一五一〇〇〇m）、C78（242、一五二〇〇〇m）、C79（245、一五三〇〇〇m）、C80（248、一五四〇〇〇m）、C81（251、一五五〇〇〇m）、C82（254、一五六〇〇〇m）、C83（257、一五七〇〇〇m）、C84（260、一五八〇〇〇m）、C85（263、一五九〇〇〇m）、C86（266、一六〇〇〇〇m）、C87（269、一六一〇〇〇m）、C88（272、一六二〇〇〇m）、C89（275、一六三〇〇〇m）、C90（278、一六四〇〇〇m）、C91（281、一六五〇〇〇m）、C92（284、一六六〇〇〇m）、C93（287、一六七〇〇〇m）、C94（290、一六八〇〇〇m）、C95（293、一六九〇〇〇m）、C96（296、一七〇〇〇〇m）、C97（299、一七一〇〇〇m）、C98（302、一七二〇〇〇m）、C99（305、一七三〇〇〇m）、C100（308、一七四〇〇〇m）、C101（311、一七五〇〇〇m）、C102（314、一七六〇〇〇m）、C103（317、一七七〇〇〇m）、C104（320、一七八〇〇〇m）、C105（323、一七九〇〇〇m）、C106（326、一八〇〇〇〇m）、C107（329、一八一〇〇〇m）、C108（332、一八二〇〇〇m）、C109（335、一八三〇〇〇m）、C110（338、一八四〇〇〇m）、C111（341、一八五〇〇〇m）、C112（344、一八六〇〇〇m）、C113（347、一八七〇〇〇m）、C114（350、一八八〇〇〇m）、C115（353、一八九〇〇〇m）、C116（356、一九〇〇〇〇m）、C117（359、一九一〇〇〇m）、C118（362、一九二〇〇〇m）、C119（365、一九三〇〇〇m）、C120（368、一九四〇〇〇m）、C121（371、一九五〇〇〇m）、C122（374、一九六〇〇〇m）、C123（377、一九七〇〇〇m）、C124（380、一九八〇〇〇m）、C125（383、一九九〇〇〇m）、C126（386、二〇〇〇〇〇m）、C127（389、二〇一〇〇〇m）、C128（392、二〇二〇〇〇m）、C129（395、二〇三〇〇〇m）、C130（398、二〇四〇〇〇m）、C131（401、二〇五〇〇〇m）、C132（404、二〇六〇〇〇m）、C133（407、二〇七〇〇〇m）、C134（410、二〇八〇〇〇m）、C135（413、二〇九〇〇〇m）、C136（416、二一〇〇〇〇m）、C137（419、二一一〇〇〇m）、C138（422、二一二〇〇〇m）、C139（425、二一三〇〇〇m）、C140（428、二一四〇〇〇m）、C141（431、二一五〇〇〇m）、C142（434、二一六〇〇〇m）、C143（437、二一七〇〇〇m）、C144（440、二一八〇〇〇m）、C145（443、二一九〇〇〇m）、C146（446、二二〇〇〇〇m）、C147（449、二二一〇〇〇m）、C148（452、二二二〇〇〇m）、C149（455、二二三〇〇〇m）、C150（458、二二四〇〇〇m）、C151（461、二二五〇〇〇m）、C152（464、二二六〇〇〇m）、C153（467、二二七〇〇〇m）、C154（470、二二八〇〇〇m）、C155（473、二二九〇〇〇m）、C156（476、二三〇〇〇〇m）、C157（479、二三一〇〇〇m）、C158（482、二三二〇〇〇m）、C159（485、二三三〇〇〇m）、C160（488、二三四〇〇〇m）、C161（491、二三五〇〇〇m）、C162（494、二三六〇〇〇m）、C163（497、二三七〇〇〇m）、C164（500、二三八〇〇〇m）、C165（503、二三九〇〇〇m）、C166（506、二四〇〇〇〇m）、C167（509、二四一〇〇〇m）、C168（512、二四二〇〇〇m）、C169（515、二四三〇〇〇m）、C170（518、二四四〇〇〇m）、C171（521、二四五〇〇〇m）、C172（524、二四六〇〇〇m）、C173（527、二四七〇〇〇m）、C174（530、二四八〇〇〇m）、C175（533、二四九〇〇〇m）、C176（536、二五〇〇〇〇m）、C177（539、二五一〇〇〇m）、C178（542、二五二〇〇〇m）、C179（545、二五三〇〇〇m）、C180（548、二五四〇〇〇m）、C181（551、二五五〇〇〇m）、C182（554、二五六〇〇〇m）、C183（557、二五七〇〇〇m）、C184（560、二五八〇〇〇m）、C185（563、二五九〇〇〇m）、C186（566、二六〇〇〇〇m）、C187（569、二六一〇〇〇m）、C188（572、二六二〇〇〇m）、C189（575、二六三〇〇〇m）、C190（578、二六四〇〇〇m）、C191（581、二六五〇〇〇m）、C192（584、二六六〇〇〇m）、C193（587、二六七〇〇〇m）、C194（590、二六八〇〇〇m）、C195（593、二六九〇〇〇m）、C196（596、二七〇〇〇〇m）、C197（599、二七一〇〇〇m）、C198（602、二七二〇〇〇m）、C199（605、二七三〇〇〇m）、C200（608、二七四〇〇〇m）、C201（611、二七五〇〇〇m）、C202（614、二七六〇〇〇m）、C203（617、二七七〇〇〇m）、C204（620、二七八〇〇〇m）、C205（623、二七九〇〇〇m）、C206（626、二八〇〇〇〇m）、C207（629、二八一〇〇〇m）、C208（632、二八二〇〇〇m）、C209（635、二八三〇〇〇m）、C210（638、二八四〇〇〇m）、C211（641、二八五〇〇〇m）、C212（644、二八六〇〇〇m）、C213（647、二八七〇〇〇m）、C214（650、二八八〇〇〇m）、C215（653、二八九〇〇〇m）、C216（656、二九〇〇〇〇m）、C217（659、二九一〇〇〇m）、C218（662、二九二〇〇〇m）、C219（665、二九三〇〇〇m）、C220（668、二九四〇〇〇m）、C221（671、二九五〇〇〇m）、C222（674、二九六〇〇〇m）、C223（677、二九七〇〇〇m）、C224（680、二九八〇〇〇m）、C225（683、二九九〇〇〇m）、C226（686、三〇〇〇〇〇m）、C227（689、三〇一〇〇〇m）、C228（692、三〇二〇〇〇m）、C229（695、三〇三〇〇〇m）、C230（698、三〇四〇〇〇m）、C231（701、三〇五〇〇〇m）、C232（704、三〇六〇〇〇m）、C233（707、三〇七〇〇〇m）、C234（710、三〇八〇〇〇m）、C235（713、三〇九〇〇〇m）、C236（716、三一〇〇〇〇m）、C237（719、三一〇〇〇〇m）、C238（722、三一〇〇〇〇m）、C239（725、三一〇〇〇〇m）、C240（728、三一〇〇〇〇m）、C241（731、三一〇〇〇〇m）、C242（734、三一〇〇〇〇m）、C243（737、三一〇〇〇〇m）、C244（740、三一〇〇〇〇m）、C245（743、三一〇〇〇〇m）、C246（746、三一〇〇〇〇m）、C247（749、三一〇〇〇〇m）、C248（752、三一〇〇〇〇m）、C249（755、三一〇〇〇〇m）、C250（758、三一〇〇〇〇m）、C251（761、三一〇〇〇〇m）、C252（764、三一〇〇〇〇m）、C253（767、三一〇〇〇〇m）、C254（770、三一〇〇〇〇m）、C255（773、三一〇〇〇〇m）、C256（776、三一〇〇〇〇m）、C257（779、三一〇〇〇〇m）、C258（782、三一〇〇〇〇m）、C259（785、三一〇〇〇〇m）、C260（788、三一〇〇〇〇m）、C261（791、三一〇〇〇〇m）、C262（794、三一〇〇〇〇m）、C263（797、三一〇〇〇〇m）、C264（800、三一〇〇〇〇m）、C265（803、三一〇〇〇〇m）、C266（806、三一〇〇〇〇m）、C267（809、三一〇〇〇〇m）、C268（812、三一〇〇〇〇m）、C269（815、三一〇〇〇〇m）、C270（818、三一〇〇〇〇m）、C271（821、三一〇〇〇〇m）、C272（824、三一〇〇〇〇m）、C273（827、三一〇〇〇〇m）、C274（830、三一〇〇〇〇m）、C275（833、三一〇〇〇〇m）、C276（836、三一〇〇〇〇m）、C277（839、三一〇〇〇〇m）、C278（842、三一〇〇〇〇m）、C279（845、三一〇〇〇〇m）、C280（848、三一〇〇〇〇m）、C281（851、三一〇〇〇〇m）、C282（854、三一〇〇〇〇m）、C283（857、三一〇〇〇〇m）、C284（860、三一〇〇〇〇m）、C285（863、三一〇〇〇〇m）、C286（866、三一〇〇〇〇m）、C287（869、三一〇〇〇〇m）、C288（872、三一〇〇〇〇m）、C289（875、三一〇〇〇〇m）、C290（878、三一〇〇〇〇m）、C291（881、三一〇〇〇〇m）、C292（884、三一〇〇〇〇m）、C293（887、三一〇〇〇〇m）、C294（890、三一〇〇〇〇m）、C295（893、三一〇〇〇〇m）、C296（896、三一〇〇〇〇m）、C297（899、三一〇〇〇〇m）、C298（902、三一〇〇〇〇m）、C299（905、三一〇〇〇〇m）、C300（908、三一〇〇〇〇m）、C301（911、三一〇〇〇〇m）、C302（914、三一〇〇〇〇m）、C303（917、三一〇〇〇〇m）、C304（920、三一〇〇〇〇m）、C305（923、三一〇〇〇〇m）、C306（926、三一〇〇〇〇m）、C307（929、三一〇〇〇〇m）、C308（932、三一〇〇〇〇m）、C309（935、三一〇〇〇〇m）、C310（938、三一〇〇〇〇m）、C311（941、三一〇〇〇〇m）、C312（944、三一〇〇〇〇m）、C313（947、三一〇〇〇〇m）、C314（950、三一〇〇〇〇m）、C315（953、三一〇〇〇〇m）、C316（956、三一〇〇〇〇m）、C317（959、三一〇〇〇〇m）、C318（962、三一〇〇〇〇m）、C319（965、三一〇〇〇〇m）、C320（968、三一〇〇〇〇m）、C321（971、三一〇〇〇〇m）、C322（974、三一〇〇〇〇m）、C323（977、三一〇〇〇〇m）、C324（980、三一〇〇〇〇m）、C325（983、三一〇〇〇〇m）、C326（986、三一〇〇〇〇m）、C327（989、三一〇〇〇〇m）、C328（992、三一〇〇〇〇m）、C329（995、三一〇〇〇〇m）、C330（998、三一〇〇〇〇m）、C331（1001、三一〇〇〇〇m）、C332（1004、三一〇〇〇〇m）、C333（1007、三一〇〇〇〇m）、C334（1010、三一〇〇〇〇m）、C335（1013、三一〇〇〇〇m）、C336（1016、三一〇〇〇〇m）、C337（1019、三一〇〇〇〇m）、C338（1022、三一〇〇〇〇m）、C339（1025、三一〇〇〇〇m）、C340（1028、三一〇〇〇〇m）、C341（1031、三一〇〇〇〇m）、C342（1034、三一〇〇〇〇m）、C343（1037、三一〇〇〇〇m）、C344（1040、三一〇〇〇〇m）、C345（1043、三一〇〇〇〇m）、C346（1046、三一〇〇〇〇m）、C347（1049、三一〇〇〇〇m）、C348（1052、三一〇〇〇〇m）、C349（1055、三一〇〇〇〇m）、C350（1058、三一〇〇〇〇m）、C351（1061、三一〇〇〇〇m）、C352（1064、三一〇〇〇〇m）、C353（1067、三一〇〇〇〇m）、C354（1070、三一〇〇〇〇m）、C355（1073、三一〇〇〇〇m）、C356（1076、三一〇〇〇〇m）、C357（1079、三一〇〇〇〇m）、C358（1082、三一〇〇〇〇m）、C359（1085、三一〇〇〇〇m）、C360（1088、三一〇〇〇〇m）、C361（1091、三一〇〇〇〇m）、C362（1094、三一〇〇〇〇m）、C363（1097、三一〇〇〇〇m）、C364（1100、三一〇〇〇〇m）、C365（1103、三一〇〇〇〇m）、C366（1106、三一〇〇〇〇m）、C367（1109、三一〇〇〇〇m）、C368（1112、三一〇〇〇〇m）、C369（1115、三一〇〇〇〇m）、C370（1118、三一〇〇〇〇m）、C371（1121、三一〇〇〇〇m）、C372（1124、三一〇〇〇〇m）、C373（1127、三一〇〇〇〇m）、C374（1130、三一〇〇〇〇m）、C375（1133、三一〇〇〇〇m）、C376（1136、三一〇〇〇〇m）、C377（1139、三一〇〇〇〇m）、C378（1142、三一〇〇〇〇m）、C379（1145、三一〇〇〇〇m）、C380（1148、三一〇〇〇〇m）、C381（1151、三一〇〇〇〇m）、C382（1154、三一〇〇〇〇m）、C383（1157、三一〇〇〇〇m）、C384（1160、三一〇〇〇〇m）、C385（1163、三一〇〇〇〇m）、C386（1166、三一〇〇〇〇m）、C387（1169、三一〇〇〇〇m）、C388（1172、三一〇〇〇〇m）、C389（1175、三一〇〇〇〇m）、C390（1178、三一〇〇〇〇m）、C391（1181、三一〇〇〇〇m）、C392（1184、三一〇〇〇〇m）、C393（1187、三一〇〇〇〇m）、C394（1190、三一〇〇〇〇m）、C395（1193、三一〇〇〇〇m）、C396（1196、三一〇〇〇〇m）、C397（1199、三一〇〇〇〇m）、C398（1202、三一〇〇〇〇m）、C399（1205、三一〇〇〇〇m）、C400（1208、三一〇〇〇〇m）、C401（1211、三一〇〇〇〇m）、C402（1214、三一〇〇〇〇m）、C403（1217、三一〇〇〇〇m）、C404（1220、三一〇〇〇〇m）、C405（1223、三一〇〇〇〇m）、C406（1226、三一〇〇〇〇m）、C407（1229、三一〇〇〇〇m）、C408（1232、三一〇〇〇〇m）、C409（1235、三一〇〇〇〇m）、C410（1238、三一〇〇〇〇m）、C411（1241、三一〇〇〇〇m）、C412（1244、三一〇〇〇〇m）、C413（1247、三一〇〇〇〇m）、C414（1250、三一〇〇〇〇m）、C415（1253、三一〇〇〇〇m）、C416（1256、三一〇〇〇〇m）、C417（1259、三一〇〇〇〇m）、C418（1262、三一〇〇〇〇m）、C419（1265、三一〇〇〇〇m）、C420（1268、三一〇〇〇〇m）、C421（1271、三一〇〇〇〇m）、C422（1274、三一〇〇〇〇m）、C423（1277、三一〇〇〇〇m）、C424（1280、三一〇〇〇〇m）、C425（1283、三一〇〇〇〇m）、C426（1286、三一〇〇〇〇m）、C427（1289、三一〇〇〇〇m）、C428（1292、三一〇〇〇〇m）、C429（1295、三一〇〇〇〇m）、C430（1298、三一〇〇〇〇m）、C431（1301、三一〇〇〇〇m）、C432（1304、三一〇〇〇〇m）、C433（1307、三一〇〇〇〇m）、C434（1310、三一〇〇〇〇m）、C435（1313、三一〇〇〇〇m）、C436（1316、三一〇〇〇〇m）、C437（1319、三一〇〇〇〇m）、C438（1322、三一〇〇〇〇m）、C439（1325、三一〇〇〇〇m）、C440（1328、三一〇〇〇〇m）、C441（1331、三一〇〇〇〇m）、C442（1334、三一〇〇〇〇m）、C443（1337、三一〇〇〇〇m）、C444（1340、三一〇〇〇〇m）、C445（1343、三一〇〇〇〇m）、C446（1346、三一〇〇〇〇m）、C447（1349、三一〇〇〇〇m）、C448（1352、三一〇〇〇〇m）、C449（1355、三一〇〇〇〇m）、C450（1358、三一〇〇〇〇m）、C451（1361、三一〇〇〇〇m）、C452（1364、三一〇〇〇〇m）、C453（1367、三一〇〇〇〇m）、C454（1370、三一〇〇〇〇m）、C455（1373、三一〇〇〇〇m）、C456（1376、三一〇〇〇〇m）、C457（1379、三一〇〇〇〇m）、C458（1382、三一〇〇〇〇m）、C459（1385、三一〇〇〇〇m）、C460（1388、三一〇〇〇〇m）、C461（1391、三一〇〇〇〇m）、C462（1394、三一〇〇〇〇m）、C463（1397、三一〇〇〇〇m）、C464（1400、三一〇〇〇〇m）、C465（1403、三一〇〇〇〇m）、C466（1406、三一〇〇〇〇m）、C467（1409、三一〇〇〇〇m）、C468（1412、三一〇〇〇〇m）、C469（1415、三一〇〇〇〇m）、C470（1418、三一〇〇〇〇m）、C471（1421、三一〇〇〇〇m）、C472（1424、三一〇〇〇〇m）、C473（1427、三一〇〇〇〇m）、C474（1430、三一〇〇〇〇m）、C475（1433、三一〇〇〇〇m）、C476（1436、三一〇〇〇〇m）、C477（1439、三一〇〇〇〇m）、C478（1442、三一〇〇〇〇m）、C479（1445、三一〇〇〇〇m）、C480（1448、三一〇〇〇〇m）、C481（1451、三一〇〇〇〇m）、C482（1454、三一〇〇〇〇m）、C483（1457、三一〇〇〇〇m）、C484（1460、三一〇〇〇〇m）、C485（1463、三一〇〇〇〇m）、C486（1466、三一〇〇〇〇m）、C487（1469、三一〇〇〇〇m）、C488（1472、三一〇〇〇〇m）、C489（1475、三一〇〇〇〇m）、C490（1478、三一〇〇〇〇m）、C491（1481、三一〇〇〇〇m）、C492（1484、三一〇〇〇〇m）、C493（1487、三一〇〇〇〇m）、C494（1490、三一〇〇〇〇m）、C495（1493、三一〇〇〇〇m）、C496（1496、三一〇〇〇〇m）、C497（1499、三一〇〇〇〇m）、C498（1502、三一〇〇〇〇m）、C499（1505、三一〇〇〇〇m）、C500（1508、三一〇〇〇〇m）、C501（1511、三一〇〇〇〇m）、C502（1514、三一〇〇〇〇m）、C503（1517、三一〇〇〇〇m）、C504（1520、三一〇〇〇〇m）、C505（1523、三一〇〇〇〇m）、C506（1526、三一〇〇〇〇m）、C507（1529、三一〇〇〇〇m）、C508（1532、三一〇〇〇〇m）、C509（1535、三一〇〇〇〇m）、C510（1538、三一〇〇〇〇m）、C511（1541、三一〇〇〇〇m）、C512（1544、三一〇〇〇〇m）、C513（1547、三一〇〇〇〇m）、C514（1550、三一〇〇〇〇m）、C515（1553、三一〇〇〇〇m）、C516（1556、三一〇〇〇〇m）、C517（1559、三一〇〇〇〇m）、C518（1562、三一〇〇〇〇m）、C519（1565、三一〇〇〇〇m）、C520（1568、三一〇〇〇〇m）、C521（1571、三一〇〇〇〇m）、C522（1574、三一〇〇〇〇m）、C523（1577、三一〇〇〇〇m）、C524（1580、三一〇〇〇〇m）、C525（1583、三一〇

四、慶応大学山岳部

パウダ・ピーク(六六七二m)初登
隊員、磯須須彦(隊長、27)、小林由幸
(26)、岡部紘(27)、板矢晏男(25)、
柴田清康(21)、井上豊秋(21)。
登山活動、BC(チェリン・コーラ、
三五〇〇m、46)、C3(東稜、
六一五〇m、421)。
四月二日、磯、板谷、井上、主稜
上の六三〇〇m(岩峰)に登ったがそ
の直後全員一五〇m滑落、ビバーク
翌朝、板谷が再びスリップ、氷河に
落ちて死亡、ロープの取扱いに問題
があったらしい。
BCではオランダのノールディック隊
の世話になった。遺体は四月三日に
発見。
登頂(52、小林、柴田)、BC撤
収(510)。

五、日本山岳会

エベレスト(八八四八m)
その登山活動の詳細はこの「山」
にも出ているので省略するが、要
点だけは紹介しておく。

隊員、松方三郎(隊長、71)、大塚博美
(登攀隊長、45)、登攀隊員二名、
科学者三名、医療、住吉仙也他三名
登山活動、BC(五三五〇m、523)、
サウス・ユール(七九八六m、428)、
第一次登頂通常ルート(511、松浦
輝夫、35、植村直己、28)
第二次登頂同じく(512、平林克敏
35、チョタレー)。
五月一七日、渡辺節子(30)、ジェネ
バ・スパーの頂点(約八〇〇〇m)を
越えてサウス・ユールに達す。女性が自
分の足で登った最高記録であろう。
成田潔思(28)、C1(六一〇〇〇m)
にて心臓病のため急死。421
キヤク・ツェリン、氷瀑で遭
難、59。
南西壁隊は四月二八日七六〇
〇m、五月一日八〇五〇〇m
に達した(加納蔵、29及び嵯
峨野宏、24)、しかし落石が
ひどく、それ以上の登攀を諦
らめた。
全員BC集合(521)。

六、日本女子登攀
クラブアンナプルナIII(七五五五
m)二登(新登頂)

隊員、宮崎英子(隊長、36)、
田部井淳子(副隊長、30)、
平野栄子(37)、漆原知栄子
(31)、平川宏子(30)、佐藤
礼子(28)、真仁田美智子
(28)、山崎茂利江(25)、大
野京子(31、医師)。

登山活動、ルートはモディ・コーラ。
BC(43、三七五〇m)、C5(5
18、六八〇〇m)、登頂519、田部
井、平井、テンジン・ギルミ、パサ
ン・ニイマ、BC撤収(531)。

◆マナスル西壁便り◆

一九七二

隊長 高橋 照

カルカッタやカトマンズで思いもか
けない時間を潰してしまい、本隊は三
月五日、私は三月七日ボカラを出発し
二日トンジエで本隊に追付き、一五日
無事BCに入りました。

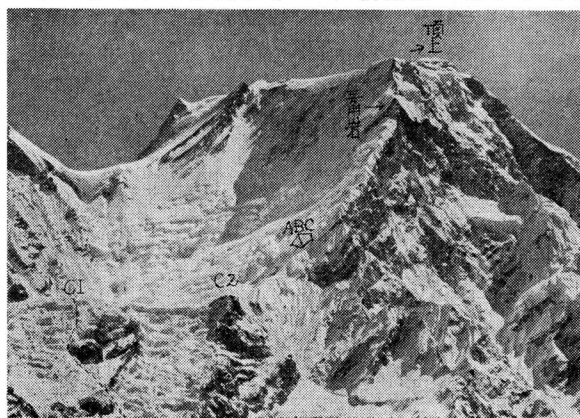
地図にあるハンブは今は人家はなく
テイルチェより先は人が住んでおりま
せん。そのハンブより一寸先でマルシ
ヤンデを渡り道と分れます。

石楠花の密林を下って河原に出て、
二カ所ほど橋を架けて、キャラ
パン最後のキャンプをし、翌日
雪が深いのでポーターと若干の
トラブルはありましたが、ドメ
ン・コーラのモレーンの上にB
Cを作りました。

昨日と今日で石で組んだかな
り立派な住居を作りました。屋
根は昨年テイルチェの部落に頼
んで作らせたニガロのマンデル
です。篠竹で作った延です。

ここからはブンギと三本槍が
真正面で、頭上にはマナスルが
雪煙をあげています。まるで高
さと距離が同じ位に感じるほど
真近かに迫っています。

昨日は二〇〇mほど新雪があり
ましたが、ポーターを帰えして
からだだったので幸いでした。も
し一日早く降ったら、二一トン
の荷物は上がらなかつたでしょ
う。



マナスル西壁予定ルート

マナルスの西北壁は写真で見たより
驚く程雪が少なく、そして立っていま
す。上部の壁は殆んど雪がありません。
ABC付近は一〇時近くならないと
陽が当りません。その上、西風が絶え
ず吹いているので、かなり酷しい登攀
になりそうです。しかし距離と高さが
同じ位短いので、ルートさえ出来れば
案外早く片ずきそうです。
BCから全部のキャンプとルートが
手に取るように見えます。ヒマラヤで
こんなルートは一寸ないでしょう。B
C付近は森林限界点で新が豊富なので
住み良くなりそうです。
登攀の成否は頂上直下の雪のない岩
稜だけに掛っているようです。
BCにて、三月一六日
(吉沢あて)
(ルートの見取図は略す)

◆ローツェ各峰の高度変更◆

「アルピニズムス」の一月号(一九
七一年)を見ていたら、例のG・O・
ディレンフルト老が、ローツェ・シャ
ールその他の高度の変更を発表してい
るのを発見した。

主峰は従来、八五〇一mとなってい
たものが、G・O・Dはこれを八五一
〇mとし、E・シュナイダーの地図が
出来てからこれが八五一〇mとな
った。現在ではこれが通用している。
D老は一九六三年にアメリカのピシ
ヨップがエベレストの頂上から撮った
写真によって計算したものらしいが、
基本は主峰の八五一〇mである。

主峰とシャル(東)との間の直線
距離は一二六〇mであるが、その間
にある各峰とシャルテ(コル)が次のよ
うに発表された。

これは従来は八三三九m
・ローツェ・シャル(八三三九m)

これは従来は八三三四m
・次のコル(八三三四m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

これは従来は八三三九m
・次のコル(八三三九m)

七、日本山岳会

東海支部

原 真
浅見 正夫

はじめに

マカルー・1970
・東南稜初登・

日本山岳会東海支部でマカルー計画が最初に企画されたのは一五六五年であった。しかし、その計画は、ネパール政府の登山禁止令とぶつかって中止せざるを得なかった。

当時、その計画の中心にあった人達は、南米のアコンカグア峰に転進して同峰の南壁を登ることに成功した(一九六六年)。以来、東海支部内では、

有志がヒマラヤ解禁の日を待ちつつけて三年が過ぎた。

一九六八年一月、近くヒマラヤ登山が解禁されるという報がネパール政府から日本外務省に入った。マカルー計画は、翌六九年を目標にして準備が再開されることになった。四月の支部総会では、委員会がつくられた。

しかし、ネパール政府は新しい登山規則をなかなか発表しなかった。そのため、六九年の計画実行は不可能となり、同年には登山許可を入手する目的を持った偵察隊が派遣されることになった。

偵察隊は、松浦正司を隊長とする五人からなり、六九年二月二十三日に日本を出発し、二十四日にカトマンズに着いた。松浦は約二十日間を費して、熱心にネパール政府と交渉した。その結果、三月十三日、ついに待望の登山許可証を入手した。ネパール政府は、マカルー隊に許可を与えると同時に新しい登山規則を発表した。この許可は、日本隊に与えられた最初のものであると同時に新しい登山規則によっておこなわれた世界最初の許可でもあった。

熊沢正夫総指揮

偵察隊は三月十九日ダランバザールを出発してマカルーへ向った。長いキャラバン

途中にあるシブトン峠越えの事情を調べたあと四月六日にベースキャンプ地であるバルンボカリに着いた。そこに五月九日まで滞在し、東南稜を六五〇〇mの高さに登り、サウ

C4上部の雪面(七二〇〇m)を登る(撮影・白旗)



頂上攻撃隊長は市川章弘であった。

登攀隊員十六名、写真家一名、朝日新聞記者一名(四月二十六日、おくて参加した)総勢十八名でハイポーターは二十五名であった。

総経費三千八百四十万円、隊荷重量十一・六トン、ポーター数往き、四百四十名(グラン出発時)、帰り、七十名(ベースキャンプ出発時)であった。

隊員、熊沢正夫(総指揮、65)、伊藤洋平(隊長、46)、原真(登攀隊長、33)、市川章弘(頂上攻撃隊長、33)、田中元(32)、尾崎祐一(30)、松浦正司(29)、尾上昇(26)、川口洋之介(26)、後藤敏宏(26)、吉原正勝(26)、長谷川勝(26)、橋本篤孝(25)、越山将男(24)、生田浩(24)、浅見正夫(21)、中世古直子(32)、芦谷洋子(25)、白旗史朗(写真家、36)、谷久光(朝日新聞記者、36)。

登山行動

本隊十五名は二月十四日東京を立ち翌日カトマンズに着いた。ネパール内で三名の先発隊と合流した。

二月二十日、カトマンズから空路ピラトナガルに至り、その日のうちに車でダランバザールに着いた。二月二十二日、キャラバンが開始されたが、ポーターが予定通りに集まらず、隊は二つに分れた。主力は三百八十名のポ

スコルまでの偵察をすませて帰った。翌七〇年に組織された本隊は、東海支部の力を結集し、全国からも人材を集めた強力なチームであった。名古屋財界から強い資金援助を受けた。隊の公式の名称は「The Japanese Makalu Expedition 1970」となり、登山の他に、高所医学、地球科学、血清疫学などの学術上の目的も持っていた。隊は二つに分れ登山班は春に、地球科学班は秋に派遣された。この学術遠征隊の総指揮は熊沢正夫(東海支部長)、隊長は伊藤洋平(同支部長)であった。この二人は登山隊のキャラバンに途中まで参加した。

登山隊の登攀隊長は原真(隊長代理)

ーターとともに先に行動し、六十名のポーターによる後発隊が三日あとにダランバザールを発つてこれを追った。アルン川に沿っての暑くて長いキャラバンの途中で、少しづつポーターの入れ替えが行われた。三月四日、最奥の部落ブンキン(セドパ)に着いた。後発隊も翌日到着し、全員がそろった。ここから眺められる、シブトン峠方面の山々には、まだ雪がたっさん残っていた。アメリカ隊(一九六四)もフランス隊(一九六五)も、この峠を三月の下旬に越えているが、それでも大変な苦勞をしている。東海支部隊はこれを三月月上旬に越えようとしていた。非常な困難が予想された。

峠越えのための準備の第一は、セドパ地域でポーターを募集することであった。隊員とシェルパの説得によってポーターたちは少しづつ集って来た。第二に、雪の中を歩かせるので、ポーターのための靴を用意する必要がある。これはキャラバンの沿道にある大きな部落(カンドバリ)で三百足手に入れたことができた。ゴム底のズック靴である。

三月九日、まず百六十名のポーターでブンキンを出発した。あとには、四名の隊員と五名のシェルパが残りの、ひきつづきポーター集めをやることになった。

先発隊は、三月十日に、三四〇〇mの稜線へ着いたが、夜半から猛吹雪になった。吹雪は翌十一日いっぱいづつき、前進も退却も出来ず、ポーターの身に危険が感じられた。十二日には、晴間が少し現われた。(つづく)

会報合本発売中

会報二五〇(三〇〇)号合本、索引付き、頒価三〇〇〇円
日本山岳会復刻版発売中 原本と同じもの。別冊解説付き、頒価四五〇〇円、送料二〇〇円。本会ルームへ。

第九回この一本展解説

(中)

『山岳』第十六年二号

小生の日本山岳会への入会は戦後である。会の歩みを知りたいと思ひ山岳のバックナンバーをバラで集めようと思ひつた。第一番目に手に入つたのがこの「第十六年二号」である。買値は一〇〇円、茶色の薄紙表紙。一九二一年（大正十年）十二月二十五日の発行。八十一ページ。とくに喜しかったのは巻頭に会員名簿が綴りこんであることだ。一九二一年の。大正十年十二月一日現在会員数七六〇名。名誉会員四名で大平茂、志賀重昂、白井光太郎、それにウェストンの各氏。正会員はアルファベット順。こんな人がといふのは福沢桃介、長谷川菊次郎、橋本辰二郎、平福百穂、平沼亮三、池野成一郎、今井五介、石井駒三、加藤完治、川村多美二、松本広信、箕治新六、寺島伍郎、中村左衛門太、那須晴野口米次郎、小川琢治、小倉伸吉、太木操、芝亀吉、竹内栖鳳、田部隆次、辻莊一、上原寿緑、上野誠一、渡正監、山川均、山本宣活、柳田国男、矢野宗幹、八代準、横山隆平、与謝野寛、結城豊太郎氏らだ。後の大臣あり、外交官あり、画家あり、油脂学者、民俗学者、政治家など実に多士済々。昔の会の性格が偲ばれる。現在名誉会員の方々ももちろんお名前が載っている。三十六人もいる。

二〇ページ目は会告と大正九年度会計報告となっている。当時の年度収入は六二〇六円で余剰金二五四七円。名簿を持っているだけで大へん楽しい。現在の若い会員もやがては業績を挙げて著名人になられることであらう。

最新番号は八〇三。創立十六年目平均五〇人入会ということになる。現在と比較してみると会員番号七〇五二。創立六四年、年平均入会者数一〇人となる。単純計算で倍増。

本文の方はスキー登山術(六鹿一彦)白鷺山登山記(吉永虎彦)、冬の赤城山(黒田孝雄)三編計八〇ページ。「山岳」は製本したものが古書店にあるものが多い。小生は未製本の刊行されたままの形で集めたいと思つている。(美坂哲男)

城先輩の遺品

三好牧野「日本高山植物図譜」(第一巻)明治三十九年成美堂刊
日本山岳会生みの親の一人、城数馬氏の手記本。私の旧制五高以来の親友で、その嗣子にあたる城富次君(高松高裁長官)が、先年「君に保管してもらうのがいばり適当だろう」と持つてきてくれたものである。なお、これとつしよに同じ遺品の彩色図鑑の「Flora Alpine (H. Correvon et Ph. Robert)」と、ツクモグサその他城数馬が採集し製作されたおし葉の標本ももらった。(このツクモグサの標本の一件その他城氏の経歴については、藤島敏男先輩の近著「山に忘れたパイプ」にくわしく紹介されている)

この本の値うちは、ただ、城氏の手記本というばかりでなく、巻頭と巻末に、自家製のインデックスがはりつけられていることにある。巻頭の分は、イロハ順に植物名を並べたものだが、おもしろいのは原本に、アイウエオ順の索引がついているのに、とくにイハ順のものを作られていることだ。たぶん、アイウエオ順は、当時としてはまだ一般になじまれていなかったであらう。巻末の分は、科別のインデッ

クスである。「蘭科」がトップで、その次が「蕨菜科」というような変わった配列になっているの興味をひく。何かわけがあるのか、武田久吉先生あたりに伺ってみたいところだ。とにかく、このインデックスについても、よくよくの植物好きであられたことが偲ばれて微笑を禁じえない。なお、扉に「進呈」のスタンプが押してある。

城数馬氏は、法律家で山草すきという点で私にとっては、かねがねあこがれの大家さんだった。その貴重な遺品を私に伝えられた富次君の選択は、まことに適切だったと自負しているといふである。(佐藤達夫)

エッケンシュタインの自署本

「この一本展」の枠内に入るようだから、署名本を一つ持参します。

オスカー・エッケンシュタインが一八九六年に刊行したカラコラム遠征記「The Karakoram and Kashmir」を献呈するに当たって行った署名が表紙にあります。扉あたりにでなく、表紙にこんな風に自署した本は、ちょっと珍しいように思われます。

著者については、カラコラム山域に関心を抱く人々には説明するまでもありませんが、一般には周知の登山家ともいえないかも知れません。最初のヒマラヤ入りは、マーティン・コンウェイに誘われて一八九二年のカラコラム遠征に参加した折で、測量など科学的な仕事を担当しています。また一九〇二年には自ら遠征隊を率いてバルトロ氷河を遡った。このときのゴッドウィン・オースティン氷河の踏査は、後進のために役立つことが多かったようです。

この著書は、家族への通信とか、日記などを、なるべく原形のまま集めたもので、コンウェイの名著「Climbing and Exploration in the Karakoram Himalayas」などに較べると、小著といふべきものですが、私の書架に加わったもの何かの縁と思つて、親しみを感じている一本なのです。(島田 巽)

山岳第六十五年予告

山岳六十五年は原稿の都合で発行が若干遅れておりますが、六月上旬には出来る予定です。主な内容は次の通りですが、一九〇一年成田安輝のシッキム経由ラッサ入りの手記「進蔵日記」といふ、これまで日本でも全く知られていない記事と松方三郎氏によるこの解説が掲載されるので御期待下さい。四十五年度会費納入者にはおとどけます。

・進蔵日記(一) 成田 安輝
・グルジャ・ヒマール登頂 薬師 義美
・モンゴル・ハルヒラ連峰 川村 光郎
・ワハン六三二九m峰登頂 平位 剛
・アイガー北壁冬期直登と下降 三羽 勝
・南極的に立つて 村山 雅美
・ウシバ南峰西壁 塚本 瑠一
・レーニン峰登頂 松本 竜雄
・エベレスト第一次偵察・一九六九 藤田 佳宏
・エベレスト第二次偵察・一九六九 宮下 秀樹
・マカルー調査隊の記録 松浦 正司
・アイガー北壁JECルート 加藤 滝男
・コヨー・ゾム登頂 小笠原重篤

・ヒム・ゾム登頂 藤井信一郎
・パンジャブ・ヒマラヤ一九六九 梶 正彦
・最近のブータン事情 小方 全弘
・大平茂ノート 渡辺 真一
・ネパール・ヒマラヤの気候 山田 和充
・追悼、図書紹介、会務報告 英文梗概、海外登山年表。

山岳26年・60年総索引刊行と予約募集

山岳26年から60年までの総索引が五月二十五日刊行されます。部数は千部限定。頒価千円(送料 荷造り代として別に二百円)です。御希望の方は五月三十日まで代金、送料をそへ本会事務局までお申し込み下さい。

内容は次の通りです。執筆者別索引、地域別索引(国内、国外)、追悼、遭難報告、図書紹介、英文索引、会務報告、事項別索引、地図、ルート図索引、編者一覧。B4版七十五ページ、クロース装。

会費納入のお願い 新年度になりました。会費未納の方は至急お納め下さるようお願い申し上げます。御存知の通り会の運営はすべて会費によつてまかなわれています。昨年度までの納入率は約60パーセント弱という数字が出ております。これを少くともあと20パーセントは増やしたいと思ひます。また四十四年度未納の方は近く会報の発送も停止しなければならなくなるのでよろしくお願ひします。昨年の十二月に払つた、四月にまたさいそくされたといわれる方もいますが、会費は年度初め納入が原則なので御了承下さい。

図書紹介

北方植物の旅

館脇 操 著

おもな内容は、ザバイカル、千島、内蒙古、山西省、スカンジナビア、アリューシャン、アラスカの紀行である。どれも、記述がこく明で、筆者とともに現地を歩いているような気分になされる。

ことに、題名のとおり、植物の名まえが至るところにちりばめられ、それが環境の描写にいっそうの生彩を添えている。たとえば、山西省五台山頂の風景にしても「ウラジオキンバイが黄金色の盃をおいて咲乱れ小さな白星を地に敷くトウトチナイソウや、またキバナシオガマを伴っていた。」というように調子で、レンズをぎりぎりに絞った鮮鋭なカラー写真を見るようだ。館脇さんは、植物学ことに北方植物についての權威だが、その一方、歌人でもあり、年齢を超越した文学青年的な（いい意味での）若さをもちつづけておられる。千島で会ったアイヌの島守の人物描写や、友だちもない孤島の少女とただ二人、北洋の海辺にガンコウランの果実をつむ話など、単なる学者の紀行文ではない。

対象は、あまり知られていない地域だし、ことに、大正から戦前にかけての千島の見聞など、いまでは貴重な記録だろう。写真の挿入も多からず少なからずなかなか要をえている。

立山と白山

広瀬 誠 著

立山と白山について、地元の北国、

富山両新聞に連載したものに増補改訂を加え、若干編を書き加えて一本にまとめたものである。著者は本会々員富山県立図書館長代理。というよりむしろ山周辺の古実についてまことよくおしくその道の第一人者である。その著者が題名通り、立山と白山の歴史、伝説文学についてうんちくを傾けているだけに、充実した内容を盛り込んでいる。

内容は、「山の姿・剛の立山・柔の白山」、「山の名・清浄無垢の白山・天を突く立山」、「山の名の移りかわり」、「万葉集の立山賦をめぐって、万葉集に歌われた立山と白山」など四十篇。いずれも深い信仰を集め、さまざまな文学に色どられ、古い歴史を持つ名山にまつわる、それぞれのエピソードがきわめて興味深くつづられている。

立山と白山について、その古実を知るハンデイな本がよき著者の手によって出現したことはまことに喜ばしい。一読を進めるゆえんである。なお本書の巻頭を飾る「立山山中略図」と「白山山中略図」はいずれも著者の手で苦心製作されたもので、見たえのある絵図である。

昭和四十六年二月北国出版社発行
新書版、二〇八ページ、定価三八〇円

第二回山岳図書を語る夕べ

『富士山』について

図書委員会

三月二十三日のこの宵は深田先生が司会をして下さることになっていました。それが先生の告別式の夜に当らうとは誰かが考えることができたでしょう。いつものこやかな笑みをたたえながら止めどもなくあふれ出してくるよう話して下さる先生のお話を、この日も楽しみにしておられた方々は多かったに違いありません。ルームに白いお

花をびん一つばいに活けながら、埋めることのできない寂しさでいっぱいでした。

今回は野上理事の司会により、吉田久兵衛氏、小林義正氏がお持ち下さった古書・古文書・絵図をはじめとして小野敏之氏がお持ち下さった明治以後の富士山積雪期の登山史的な文献を中心に話が進められました。

富士山はおよそ九世紀ごろに開山されたといわれていますが、登山史として古いものは九世紀の中ごろに書かれた都良香の『富士山記』でこれには頂の火口の様子がはつきり記されているとのこと。印刷の上から一番古いと思われるものは『富士山人穴双紙』（物語）正保三年（一六四六年）で、これはいろいろな種類のものがあり、鎌倉以前のもは写本として伝わっているということです。また、絵図としては『富嶽図記』寛保三年（一七四三年）が古く、『竹取物語』には煙の出ている富士山の絵が載っているといえます。次に文献の一番古いものは富士山の岩穴に関する文書で天文二十四年（一五五五年）のものが残っているとのこと。

珍しいものをいろいろ見せていただきましたが、そのうちで、吉田氏のお持ち下さった辻の坊に残されていたという豊臣秀吉の印のある天正十八年（一五九〇年）の文書や、小林氏蔵書の『富士山人穴双紙』、また、小野氏の『富士山人穴双紙』、明治二十年（内務省地理局中央気象台）など大変興味深いものでした。今回持参されたものは次のとおりです。

富士山人穴双紙、富士野往来（天明四年）、富士山略縁起、簡堂叢書、不尽志駿城記（写本）、富嶽真図、富嶽図記（寛保三年）、今川氏実が修驗者の坊に宛てた文書（永禄三年）、豊臣

秀吉の印のある富士山岩穴に関する文書（天正十八年）、富士山神定之図、富士山諸人参詣之図（横川影竹）、不二詣諸品下山と氣球が入っている——ヒマラヤ山と氣球が入っている——、富士山百首詩（文禄二年）、横沢山岳会年報第二号、富士案内、少国民第十一年十四号富士山奇観（野中夫妻の富士での越冬記録）、探険世界雪中富士登山号（明治四十二年）、アラレ雪中登山号（俳句雑誌）、麻布中学校会雑誌第三十五号（明治四十四年）、スキー第一号、二号、富士山上実測復命書（明治二十年中央気象台）、富士山頂気象観測報告書（明治二十二年中央気象台）、富士山浅間登山紀行。

これらの他に吉田氏には、吾妻山噴火の図や、上越の古い絵図（谷川岳は谷川富士となっており、この地方では高いところへ登らないと富士山は見えないとわざわざことわり書きをして真白な富士山が入っている）などをみせていただきました。

また、外国人として一番早く富士登山をしたのはオールコックで、「大君の都」（岩波文庫）という著書があるとのこと。

深田先生も富士山について書いておられるものがありますが、図書室にある先生の著書は意外に数が少く、一同残念に思いました。

深田先生に富士山のお話を伺えなかつたことは大変心残りですが、ご一緒した一同から御冥福をお祈り申し上げます。

当日の出席者は次のとおりでした。
吉田久兵衛、島田巽、山崎安治、小林義正、神原忠夫、伊藤博夫、油谷次康、浦野勇逸、小野敏之、村石幸彦、岡田幸雄、松村泰良、堀内章雄、河野幾雄、野上成男、武田満子。

(武田)

図書室便り

(昭和46・3)

図書受入報告

- 社会思想社寄贈
 - (1) ロレンス・カーワン著 加納一郎訳『極地探検の歴史—白い道—』昭和46
 - (2) スタンレー・ロジャース著 奥幸雄訳『13の探検物語』（現代教養文庫六八四）昭和45
- 皆美社寄贈
 - (1) 熊谷樵著『晴れのち曇り曇りのち晴れ』昭和45
- 毎日新聞社寄贈
 - (1) 植村直己著『青春を山に賭けて』昭和46
- 中央公論社寄贈
 - (1) 瓜生卓造著『谷川岳—生と死の条件—』（中公新書 二〇〇）昭和44
- 芙蓉書房寄贈
 - (1) 青木文教著『西蔵』昭和44
- 岩波書店寄贈
 - (1) V・マッソン著 加藤九祚訳『埋れたシルクロード』（岩波新書七六九）昭和45
- アルムクラブ寄贈
 - (1) アルムクラブ編『川原和也君追憶号』昭和46
- 立教大学山岳部寄贈
 - (1) 『穂高—昭和41年冬山合宿事故報告書 磯井文雄・本間耕一君追悼集—』昭和46
- 成美堂出版寄贈
 - (1) 山本脩著『日本秘境の旅』昭和44
 - (2) 八尋舜右著『旅のコーチ信濃路』昭和44
- 読売新聞社寄贈
 - (1) 中河与一著『ネパール—印度—』昭和45
- 東都書房寄贈
 - (1) 植木毅著『マッキンレーへの挑戦』昭和45

昭和45 成山堂書店寄贈 (1)宮内駿一 田島成昌共著『百万人の天気図』 昭和44 (2)熊沢源右衛門著『天気図と気象』 昭和46 海文堂寄贈 (1)淵秀隆 宮内駿一 共著『天気図をいかにする』 昭和44 大和書房寄贈 (1)白旗史郎著『青春を賭けて値するもの』(銀河選書八六) 昭和46 日本文芸社寄贈 (1)東京緑山岳会編『谷川岳の岩場』 昭和44 中京山岳会寄贈 (1)中京山岳会編『青い氷河』 昭和45 早稲田大学ワンダーフォーゲル部寄贈 (1)早稲田大学ワンダーフォーゲル部編『北ボルネオ合宿報告書』 昭和44 東京新聞出版局寄贈 (1)辻まこと著『画文集 山の声』 昭和46 (2)安久一成著『雪山技術』 昭和45 (3)安久一成著『ロッククライミング』 昭和43 (4)小森康行著『日本の岩場』 昭和44 朝日新聞社寄贈 (1)有吉佐和子著『女二人のニニギニア』 昭和46 (2)喜里山慶子著『ママさんサハラを行く』 昭和45 (3)ウォーリ・ハーバート著 木村忠雄訳『北極点を越えて』 昭和45 (4)今井通子著『私の北壁―マッターホルン―』 昭和44 (5)水野祥太郎著『砂漠の国の病院で』 昭和45 (6)村山雅美著『南極点への道』 昭和44 山と溪谷社寄贈 (1)山里寿男著『登山者のためのスケッチ入門』 昭和45	(2)金坂一郎著『冬山技術セミナー』 昭和43 (3)東京雲梯会編『丹沢の山と谷』 昭和44 (4)岡部一彦著『新版・登山技術』 昭和46 (5)齊大猪久介著『ニッポン動物記』(山溪新書1) 昭和45 (6)新田次郎著『山旅ノート』(山溪新書2) 昭和45 (7)W・ウェストン著 岡村精一訳『極東の遊歩場』 昭和45 (8)吉沢一郎著『登山技術―新しい理論と実践―』(山溪新書5) 昭和46 (9)石山尚著『山の地学入門―大自然の驚異―』(山溪新書6) 昭和46 (10)中川十二著『旅行やまにらみ』(山溪新書7) 昭和46 (11)山と溪谷社編『美しき日本』 昭和45 (12)山川勇一郎著『ヒマラヤ画集』 昭和34 (13)杉浦康・城厚司共著『実用世界旅行』 昭和45 松永敏郎氏寄贈 (1)国学院大学山岳部編『足引 No. 5 追悼集』 昭和46 中村綱氏寄贈 (1)中村綱氏著『山岳異妖物語』 昭和45 向後元彦氏寄贈 (1)向後元彦著『一人ぼっちのヒマラヤ』 昭和39 ベールマガジン社刊 定期刊行物受入報告 【部報・会報類】 (1)山村民俗の会『あしなな』 No. 125 46-2 (2)関西学院大学体育会山岳部『Das. EDELWEISS』 No. 16 46-3 (3)広島大学医学部山岳会『岳友』 No. 4 45-12 (4)『北海道自然保護協会 会報』 No. 10 46-3 (5)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 46 46-3	46 46-3 (6)東京慈恵会医科大学山岳部『JO-CH』 No. 10 46-12 (7)日本登山協会『山と雪』 No. 155 46-3 (8)京都山岳会『京都山岳』 No. 551 46-3 (9)日本職業スキー教師連盟『ニュース』 No. 5 46-2 (10)東京野歩路会『山嶺』 No. 491 46-3 (11)日本自然保護協会『自然保護』 No. 104, 105 46-1 (12)『登歩溪流会会報』 46-1 【雑誌】 (1)創文社『アルプ』 No. 157 46-3 (2)山と溪谷社『岩と雪』 No. 20 46-3 (3)山と溪谷社『現代の探検』 No. 3, 4 46-3 (4)中日新聞『岳人』 No. 286 46-3 (5)山と溪谷社『山と溪谷』 No. 391 46-4 【その他】 (1)札幌山の会『持頂 知床庄』 No. 12 45-1 (2)名城大学『ミル・サミールからフアラクサルへ』 (3)長野県山岳協会『海外登山研究Ⅱ』(海外登山研究会誌) (4)箱根町教育委員会『箱根の文化財』 No. 2, 3, 4, 5 (5)日本ヒマラヤ山岳協会『ネパール王國旅行案内』『カトマンズとその周辺』『エベレストの麓』 Journals Arrived in March 1971 1. "Die Alpen", No. 2, February 1971. 2. "Alpinismus", February 1971. 3. "Appalachia bulletin", Vol. 37, 38, No. 1, 2, January-February 1971. 4. "Der Bergsteiger", Jahrgang	38, Heft 1, 2, January-February 1971. 5. "Deutscher Alpenverein", Jahrgang 23, Heft 1, Jan./Feb. 1971. 6. "La Montana", No. 14, December 1970. 7. "La Montagne et alpinisme", Année 96, No. 79, October 1970. 8. "Panorama of Slovakia", 1970-10, 11, 12. 9. "Sendoras" No. 144, December 1970. 洋書受入報告 Dr. Arnold Gabler 寄贈 1. "Die Mineralien der Schweiz" by Max Weibel. Schweizer Alpen Club, 1970. ヒム・ブヌワフリコフ氏寄贈 1. "МОБЕЖДЕННЫЕ БЕР-ШИНЬ 1965-67" by Соболевского Альпинизма. Мысль 池内やん本会図書室に勤務 本会図書室職員東満子氏は一身上の都合により三月三十一日退職、その後任に四月一日から池内みよ子氏が勤務することになった。池内嬢は東洋大短大卒、山にはまったくしろうとですがよろしく願います。 会務報告 三月臨時理事評議員会 (25日午後6時本会ルーム) 出席者 三田会長、吉沢副会長、藤井、山崎、丹部、野上、宮内、熊谷、牧野内各理事、加藤、村山、島田、織内、金坂各評議員、今井、小原監事、石原委員 開会に先立ち三田会長より、深田副会長急逝の報告と追悼の言葉が述べられ、全員黙祈する。 ・議事 昭和四十六年度予算案(丹部) 原案について大要説明あり、原案通り承認、総会にはかることにする。なお二月現在四十五年度会費未納者が五十五%あり、この件について今後常務理事会で検討することにした。 ・昭和四十六年度役員(藤井) 深田氏の後任をどうするか、即急に検討し結論を出すことにし、総会に一週間延期することにした。もし総会に間にあうよう決定しない場合は総会で理事会一任ということ承認してもらう。入選については三田会長から評議員全員に意見を求めることにする。 会員総会(藤井) 四月十七日(土)と予定していたが四月二十四日(土)午後二時本会OOG A会館とし、また支部長会議も四月二十五日午後一時本会ルームと変更することにした。 (藤井) ・上高地山荘の件 石原山荘委員に設計図と見つもりを作ってもらった。至急松本営林署に書類を提出することにした。なお設計図について石原委員より説明があり費用約三千万円の見つもり案が出された。五月早々山崎理事に松本へ行ってもらうことにする。 (藤井) ・深田氏死去の件 深田久弥氏は三月二十一日茅ヶ岳登山中急逝された。二十三日世田ヶ谷区永福町本願寺別院で葬儀が行なわれたが、本会から花輪一對、役員一同として香典五万円を出した。また石川富山、新潟、東海、山梨、関西、北海道各支部および加藤泰安氏から生花、兵庫山岳連盟、神戸宮崎市長から花輪をルーム事務局を通じて豊前にそなえた。
---	--	--	--

深田氏の叙勲について文部省から手続をするよう要請があり、野上理事に書類を作ってもらったことにした。

また深田氏の追悼会についても即急に準備をすすめることにした。

▽報告

・山日記の件

(牧野内)

十二月までの会費納入者には四十六年度山日記を無償で配布することになったが、発送が遅れており、至急発送する。

四月臨時理事会

(3日午後5時半本会ルーム)

▽出席者 三田会長、吉沢副会長、藤井、丹部、山崎、野上、大森、他は委任

▽議事

・次期副会長候補の件

(藤井)

深田氏死去に伴ない、評議員全員に次期副会長につき、欠員とする、二名とする、その場合の候補者名をあげてもらった、三項目について書面で意見を求めそれに基き、次期副会長案として次期監事候補の成瀬岩雄氏を理事会として推すことに決める。なお次期監事候補には山下一夫氏をお願いすることにし、総会にはかることにした。

・深田氏叙勲申請の件

(野上)

文部省スポーツ課へ書類を提出し、近く内示がある。

・都岳連常任評議員の件

(山崎)

都岳連より次期常任評議員一名推薦してほしいむね要望あり、現都岳連監事山崎理事に依頼することにした。

・平沢亀一郎氏台湾登山の件(藤井)

四月理事評議員会

(7日午後6時半本会ルーム)

▽出席者 三田会長、吉沢副会長、藤井、丹部、山崎、野上、神原、宮下各

理事、織内、渡辺公、望月、金坂各評議員、小原、今井監事

▽議事

・四十六年役員

(藤井)

四月三日の臨時理事会で成瀬岩雄氏を副会長候補、山下一夫氏を監事候補と決定その他は原案通りとして総会にはかることにした。場所は赤坂のOGA会館、日時は四月二十四日午後二時とし、終わって午後五時から同所で深田久弥氏追悼会を開くことにした。

・深田氏追悼会の件

(山崎)

追悼会は深田夫人、長男森太郎氏にも出席していただき、三田、藤井、望月、田中(栄)の四氏に話してもらったことを考慮しており、いま一度藤井氏の意向を打診する。司会は山崎がする。なお深田家より金十万円を会へ寄付していただいたが、この使途については別途考慮する。

・エベレスト南壁隊の件

(山崎)

植村、伊藤両隊員からの連絡によると二人は南壁要員に選ばれ、すでに第一キャンプが建設された。

・台湾招待の件

(山崎)

中華全国山岳委員会、中華民国台湾省体育会山岳会の周百鍊会長から五月五日台北市で成立二十五周年記念大会を開くので、本会に二名招待の手紙がきた。秋の双十節に平沢氏一行が行くので今回は残念ながら辞退することにし、そのむね回答する。

・四十五年度収支決算の件

(丹部)

四月十四日常務理事会を開き、最終的な決算をする。

▽報告

・ネパール大使館現地補助員の件

(神原)

三月二十九日本会ルームで井口一等書記官、小原、石坂、神原、藤井、山崎で選考会を開き福岡山の会の高山一義氏(二十八歳)と決めた。

・本会図書職員

(山崎)

東満子氏が三月一杯で都合により退職、後任として池田みよ子氏を決定した。

二九六九 品山大海 昭和四六・二・一四逝去

三九〇四 高波音楽 昭和四六・三・四逝去

六四九八 千木良滋夫 昭和四六・三・一七逝去

一五八七 深田久弥 昭和四六・三・二一逝去

ルーム誌(46年3月)
3日(水) 理事評議員会
10日(水) 常務理事会
財務委員会
第二六九回小集会大阪大学
山岳会ビーク二九登山隊一
九七〇年報告 講師 住吉
仙也氏

17日(水) 指導研究委員会
23日(火) 山岳図書を語る夕べ
25日(木) 臨時理事評議員会
26日(金) 北大山の会
29日(月) 駐ネパール日本大使館現地補助員選考会
30日(火) 稲門山岳会
31日(水) 東満子事務局員送別会
三月中来室者 三二四名

品川大海氏死去さる

品川大海(本名信春)氏が昭和四十六年二月十四日死去された。氏は昭和二十三年十月六日本会入会、会員番号二九六九番。
明治三十年三月四日生まれ。大正七年八北ラフト東海岸に石油地質の調査に行き、尼港事件の生存者といふ変わった経歴を持ち、明治四十年米山登山、大正二年蓮華温泉―白馬岳―大町―松本―寛寛床。同三年大臼川。同十一年箱根山。同十四年大雪山。同十五年カムチャッカ・チンスー(三七〇〇m)昭和二年カムチャッカ半島西

代表者変更
三五二三 第一生命保険相互会社山岳部代表 吉田博至
四二一〇 新潟電話局山岳部代表 奥山誠一
退会者(46年3月)
四九三八 永原栄一
五六二二 村木寛茂
五九五一 清水周一
六〇九三 六嘉敏雄
物語者
五五八四 篠原 進 昭和四五・一一・二三逝去

岸北部地方へ三回踏査、同六年カムチヤッカ東岸クリニエフスク活火山（四八五〇m）七合目まで登山。同八年西北千島シムシム島アライト富士。同十八年黒田正夫夫妻と北千島北部連峰。同十九年中千島海岸。同二十年北千島抑留。同二十二年十一月函館に帰る。

右のようななかなか変わった山歴のお人で執筆をすすめたのですがそれがありませんでした。（藤島 玄）

成田隊員一周忌法要

昨年四月二十一日、エベレストの第一キャンプで他界した成田潔忠隊員の一周忌の法要が、去る四月十日午前十一時より、浦和市東岸町の円蔵寺で行われた。本会より、松方隊長、大塚登攀隊長、松田、平野、堅野の各隊員、宮下秀樹理事が出席し、ご冥福を祈りました。これに引き続き同日午後二時三十分から、埼玉県比企郡長瀬にある、武蔵野霊園の成田家の墓地に納骨が行われました。

墓地は、秩父の前山である比企丘陵の見える高台にあります。納骨は、前記隊員の他に広谷、木村の隊員も参加、慶応登高会の多勢の山仲間に見守られておごそかにとり行われました。（墓地）武蔵野霊園西六条一区（P）東武東上線武州長瀬駅下車。

故深田久弥氏に叙勲

四月十九日、故深田久弥氏に従五位、勲四等、旭日小綬章が叙勲され、四月二十五日OGA会館で開かれた追悼会の席上長男森太郎氏に三田会長からお渡した。

富士山登山技術講習会延期

五月二十九日から六月一日まで富士山五合目で行なう予定の登山技術講習会は、現地の積雪が不足のため一応中止し、十一月に延期することになった。参加者

ガストンの山岳書店
店主・L.C.ボーム(英国山岳会員)
登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案内書、特殊地図、版画なども取扱っております。型録その他のご照会、お申込みをお待ちしております。

宛名 **"GASTON'S ALPINE BOOKS"**
134 Kenton Road, Harrow Middlesex,
HA3. 8AL. England
(なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr. Ichiro Yoshizawa は、私の親しい友人です。)

へはまたあらためて御連絡します。

あとがき 深田氏の急逝から引き続いて、会員総会、追悼会、支部長会議と全くテンテコ舞い。ほっとする間もなく本号の校正というわけで、何の因果で……と思わずグチが出ます。会員各位のより一層のサポートを期待する次第です。

（山崎）

昭和四十六年五月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金 700 円也
送 料 別 受 け 金 120 円也

ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731) 7331 (代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352) 1556・1557

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B5判206頁〉定価2,800円

40年のキャリアをもつ編集と内容。

赤いカバーでおなじみの……

山日記 1971年版

日本山岳会編

〈A6判400頁〉定価750円

山 岳

日本山岳会編

〈A5判〉

64年 2,000円

63年 2,200円

62年 2,000円

61年 1,800円

60年 1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

〈B5変型判220頁〉定価3,000円

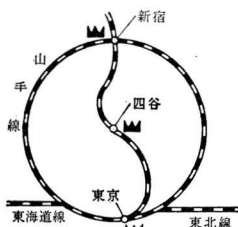
南極新聞1956～7年

南極研究会編

〈B5判横トジ〉定価600円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●買いやすい
山の店●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要するものがある。
なにより人間でずかり
として登山にずかり

どうしても必要なものを
ここにそろえておきます
主責任はもっています

かたるぎンティ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 34440

